

世界の色彩語の種類と進化…「ブッシュマン」の言語の調査がもたらす新知見

報告 中川裕

色彩という意味領域は、言語の普遍的性質を反映すると広く考えられている。この見解は、Berlin & Kay (1969) の *Basic color terms* の刊行から優勢になったものだ。彼らはそこで九八言語に基づき色彩語体系の種類と進化を説明する言語学的色彩モデルを提案した。その後を継ぐ調査の集大成 Kay et al. (2010) *World Color Survey* は一〇言語の資料を追加し、彼らのモデルに敷衍と発展をもたらした。だが、ここではコイサン諸語（いわゆるブッシュマンとホッテントットの言語）の資料は全く考察されていない。私の報告はコイサン諸語の一つであるグイ語の分析から彼らのモデルを検討する試みである。

彼らの言語学的色彩モデルにとって最も要となる概念は、各言語ごとに同定される基礎色彩語である。彼らは、まず、三二九色のマンセル色彩チップを使って、サンプル言語の話者から各チップの色の呼称を集めた。次に、集めた色呼称を分析して基礎色彩語を設定した。この分析に備えて、彼らは、基礎色彩語を同定するために言語横断的に用いることのできる統一された手法を考案した。それは次の四基準（と補則）からなる。基礎色彩語は、(1) 単一語彙素であり、(2) 他の色彩語の下位語ではなく、(3) 広範囲の対象に使われ、(4) どの話者もよく使う。したがって、例えば日本語や英語では、(1)により「黄

緑」、(2)によりscarlet、(3)によりblond、(4)により「もえぎ」は基礎色彩語から除外される（補則は省略）。

このような手法で彼らは世界の言語の基礎色彩語体系を比較し、図1に模式的に示すような一般化を提案した。その内容は次の四点に要約することができる。(1) 普遍的な十一基礎色彩範疇 (White, Black, Red, Green, Yellow, Blue, Brown, Purple, Pink, Orange, Grey) が認められた。

(2) これらの範疇の語彙化の通言語的頻度は異なり（左が語彙化されやすく、右が語彙化されにくい）、不
等号は語彙化されやすさの序列を示す。(3) 言語は二〜十一範疇を選んで語彙化する（数字は基礎色彩語体系の単語数で、体系の種類に該当。二語体系は必ず白黒。三語体系は必ず白黒赤。四語体系はそれに緑か黄が加わる、等々）。(4) このモ

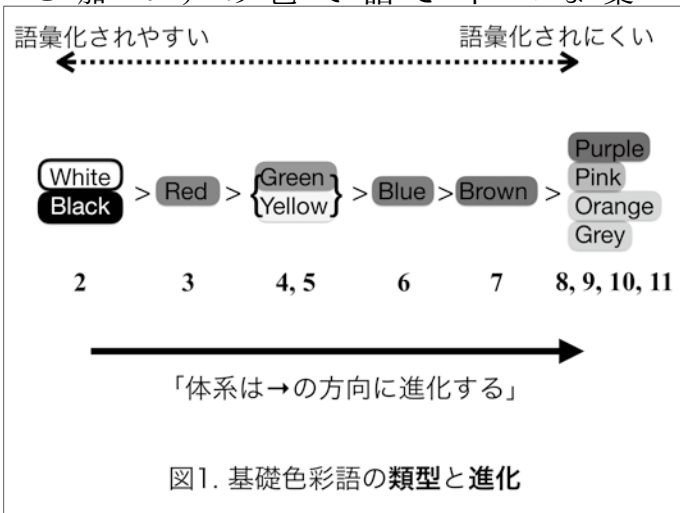


図1. 基礎色彩語の種類と進化

デルは、基礎色彩語体系の類型と同時に進化も捉えており、体系は右向きに進化する。

Berlin & Kay (1969)以降、現在までの、このモデルの発展・敷衍について、補足すると、まず十一範疇のうち左の六色に特別な地位を認め、「主要色」とする。そうすると、残りの五色は、主要色を混ぜることで出来上がる「混合色」と捉えられる。さらに、世界の言語には「複合色」と呼ぶべき基礎色彩語が観察され、それは二あるいは三個の焦点色を持つ複合的な構造の範疇で次の七種類が確認された：（焦点色を「なつなぎ」でくくつて示す）[Green/Blue] [Black/Green/Blue] [White/Red/Yellow] [Black/Blue] [Red/Yellow] [Yellow/Green/Blue] [Yellow/Green]。これら七種の複合色を構成しているのは常に六つの主要色のいずれかであることに注意されたい。このように主要色は混合色と複合色を構成する元素的な役割を果たすと考えられる。

以上が Berlin & Kay (1969) から Kay et al. (2010) に至る基礎色彩語を用いた世界色彩俯瞰プロジェクトの成果の要領である。この世界色彩俯瞰調査がまだ考察していない言語群に、南部アフリカのコイサン諸語がある。私はその諸言語の一つであるグイ語（コエ・クワディ語族カラハリ・コエ語派）を対象に、彼らと同様の手法を用いて基礎色彩語彙分析を行った。その結果は図2のように模式的に要約できる。

図2に示す通り、グイ語の基礎色彩語は六語体系だ。これを図1の Berlin & Kay モデルが予測する六語体系 (i.e. 主要六色からなる体系) と比較すると、次の四つの変則性が観察される。(1) Yellow の不在 (2) [Green/Blue] の未分化 (3) Grey の存在 (4) [Brown/Purple] の存在。これらはいずれも Berlin &

et al. の理論に対して、モデルまたは方法論の拡大・改訂の議論を示唆する。以下、最後に、紙幅の都合により発表で論じたものうち (4) についてだけ記す。(4) の [Brown/Purple] は二つの焦点色をもつ複合色だが、従来にはなかったユニークな特徴を持つ。それは焦点が二色とも主要色ではなく混合色である点だ。このような、いわば超複合色を持つ言語はこれまで報告されておらず、Berlin & Kay モデルは、これを組み入れるような拡大が必要となる。さらに、グイ語が通常の複合色 [Green/Blue] ももつことを考慮すると、主要色・混合色・複合色・超複合色の語彙化には、次のような階層性が認められるという仮説を立てることができる。

主要色∨混合色・複合色∨超複合色

謝辞

この研究は科研費基盤研究 A (16H01925, 16H02726)・基盤研究 B (25300029) および三菱財団人文科学研究助成金を受けている。

参考文献

Berlin, Brent & Paul Kay (1969) *Basic Color Terms: Their Universality and Evolution*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
 Kay, Paul, Brent Berlin, Luisa Maffi, William R. Merrifield, and Richard Cook (2010) *World Color Survey*. CSLI Publications.

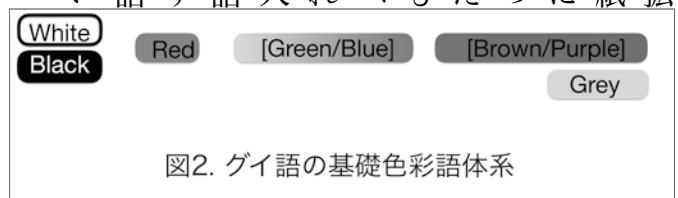


図2. グイ語の基礎色彩語体系